UH-1ヒューイにホイスト導入、救助力を強化

Yokota enhances rescue capabilities

March 3, 2016

Original text by Airman 1st Class Delano Scott
374th Airlift Wing Public Affairs

第459空輸中隊はこのほど、UH-1Nヒューイ2機に新たに救助活動用ホイスト(ワイヤーを使用した吊り下げ・吊り上げ救助装置)を装備し、関東地域における空からの救難救助体制を強化した。

ホイストを使った救助訓練を行う第459空輸中隊の隊員たち
(Photo/Osakabe Yasuo)

「ホイストを使えば、ヘリが着陸できない現場へも行くことができる。人を山の斜面から引き上げることから、物資にダメージを与えずに建物の屋上に届けることまで可能となり、これまで限られていた能力を大幅に広めた」と第459空輸中隊特殊任務飛行班のニコラス・ポー軍曹はコメントした。

特殊任務飛行班の隊員は、ホイストを使用するための初期認定を取得した後も、技術を維持するために訓練を継続しなくてはならない。ホイスト導入前の第459空輸中隊特殊任務飛行班の隊員のほとんどは、ホイストを使用することがなかったので、訓練を積み、技術を維持することが必要だ。

再認定を下すため、カークランド空軍基地第512救難中隊(ミネソタ州)とフェアチャイルド空軍基地第36救難中隊(ワシントン州)から特殊任務飛行班の指導官が横田基地に出向し、第459空輸中隊のフライト・エンジニアたちを訓練した。再認定取得の過程では、指導官監督のもと、ホイストを使った救助作戦の演習が昼夜実施された。

「ホイスト訓練は、『ハイハイ、歩く、走る』イメージの3段階式に行われる。初めは、器材について一部終始を学ぶ。次の段階では、指導官の監督の下、日中にホイストを使った運用演習を行う。最終段階では、実際に暗視ゴーグルを用いて夜間にホイストを使う実地練習を行う」と第512救難中隊特殊任務飛行班のUH-1パイロットのロバート・コノウィックス大尉は話した。

横田のUH-1Nフライトエンジニアたちは、再認定取得の過程では、これまで行ってきた訓練のシナリオ、捜索救助活動の経験が役立ったと述べた。

ホイストを使って隊員をUH-1ヒューイに引き上げる訓練の様子

「航空機に新たな能力が与えられただけでなく、ホイストを横田に導入したことにより、我々、フライトエンジニアが今まで、本国の基地や戦地で経験してきた救難救助活動を横田で実践する機会を得たことはとても幸運だ。再認定取得は、これまでの任務地と初期の訓練の経験により技術的な磨きをかけ、実践できるよう役立っている」と第374運用群特殊任務飛行班のマイケル・ライト技能軍曹は語った。

ホイストがなかった頃は、狭いエリアでの救助活動は困難だったが、第459空輸中隊は関東地域で幅広い捜索救助活動を行うことが可能となった。航空機に新たな戦力が導入されたことによって、フライトエンジニアたちは不測の事態に備え、ホイストの訓練と経験を積み重ねている。